

海に生きる女性 ——船上生活者と海女——

藤川 美代子 (南山大学)

日本の船上生活者(以下、「家船」と記す)と潜水漁者(男女を含む)の民俗学研究からは、両者には共通点が導き出せる。①歴史を遡ると、いずれも「あま」と呼ばれてきた点、②その活動には、家族で船に住まう漂泊的な生活が付随した点、③採った海産物を船や陸路で(多くの場合)女性が内陸農村・都市の得意先へ運び、農産物と交換する「かえこと」が付随した点、④自村から離れた地域との特別な関わりを示す語りや巻物の存在を根拠に、他地域への自由な出漁・行商・薪採りが許可されていた点である。なかでも、「海女」(潜水漁をする女性)は、海での潜水漁のほか、家事・育児・畑仕事・行商をこなし、家計を担う「強たくましく働く女性」の代表格として発見された。この女性像の功罪はさておき、私が注目したいのは次の三点である。すなわち、瀬川清子や岩田準一・宮本常一(後者二人は渋沢敬三のアチックミュージアムの同人)ら初期の研究者は、①家船や海女の行商・出漁が、自らの浜を飛び出し、他県・朝鮮・台湾にまで及ぶ範囲で展開していたこと、②行商は、自ら採った海産物と米麦粟との交換から、次第に反物・衣服の仕入・販売に発展したことに注目し、その新地・新規開拓性を把握していた点、③男性の潜水漁師「海士」にも目を向け、海女の特異性を強調しなかった点である(cf.瀬川 1942,1943;最上 1967;岩田 1971;宮本 1975)。つまり、家船・海女をまなざす民俗学は、一村・一国内・単ジェンダー内にとどまらず、(現在の国境を越える)多地域間の多様な人々の関係性理解へと開かれる可能性を秘めていた。

私は、中国福建の河・海で船上に暮らしてきた「連家船漁民」や台湾東北部の海で素潜り漁をする「海女(ハイルー)」の研究を進めている。特に後者は、①特に明治期以降、寒天(・原料のテングサ)が国際商品化したこと、②日本が植民地政策下でテングサ漁場開拓を試みたことを背景に登場している。また、彼女たちの現在を考える時、③素潜り漁の男性、タンクを背負う原住民やダイバー、産地問屋など多様なアクターとの関係性や、④世界の海藻産地(アフリカ・南米等)との競合、消費地の中国大陸・香港・韓国・日本との関係性を無視することはできない。他方で、露店での商品販売をめぐる海女同士の駆け引きなどマイクロかつ日常的な部分への注視なしには、海女の生活は理解不能であることも痛感している。

ところで、柳田国男や折口信夫とは異なる視点から「常民」の学を試みた渋沢の同人たちはその後も、俵物や捕鯨など、具体的なモノと、一国内では周縁的な存在に見える「海の民」を主役に据えることで世界規模のネットワークを描き得る(鶴見良行にとってのナマコのような)テーマに注目しながら、実現には至らなかった。世界常民学を目指すならば、別個の国家内部で発見・自覚された均質的で、かつテーマ別に切り刻まれた常民・民俗の見識をもちより比較するという隘路よりも、モノや人を介して実際につながっていく「民」の日常と、越境的に世界へと広がるそのネットワークの重なりを描くことに可能性を見出す道に向かうこともできるのではないだろうか。

【参考文献】 岩田準一 1971 『志摩の海女』中村幸昭

河岡武春 1987『海の民:漁村の歴史と民俗』平凡社

瀬川清子 1942 『海女記』三國書房 1943『販女』三國書房

鶴見良行 1990 『ナマコの眼』筑摩書房

最上孝敬 1967 『原始漁法の民俗』岩崎美術社